

全日本学生写真コンテスト

野尻湖^{セレクト}_{編集}合宿

総括書

—現実のどの位相に向うか—

全日本学生写真コンテスト実行委員会

全日本学生写真コンテスト

野尻湖^{セレクト}_{編集}合宿

総括書

—現実のどの位相に向うか—

全日本学生写真コンテスト実行委員会

このテキストは全日本学生写真コンテストセレクト・編集合宿（七三年三月三日～四月四日）に及いて、二万数千点に及ぶ全国各地から集められた写真と、七十人という全国から集まった人間の中で写真について、さらには写真から派生する様々な問題性の中で互いに語られ議論が重ねられたものより編集されました。

この年七三年の時点に及いて全日本学生写真コンテストが企画され、強力に押し進められたのは、写真を撮る人間の側から、写真を、取り返そうとする動きの一つです。単に既成のコンテストの如く著名人を審査員に連ね、一般的評価を作品に与えると言った催し物の類ではないのです。

日本の写真界は多くの写真家たちが今まで多様に時代に対し試みてきた様な多くの写真群の方向性を一挙に失ったかのように見えます。どの写真雑誌を見てもその中にあるのはただ混乱と低迷が渦巻いている姿だけでした。そうした中で我々は同じ様に低迷する学生写真界にあり、この現状を打ち破るべく、写真の本質に立ち返り「本当に我々の目指す写真は何か、写真のフォーマリズム化への激化の中で、写真の未来は、可能性はあるのか、」そういった疑問の中でコンテストを企画しました。それは写真の良し悪しの評価の決定でなく、全国一万人にも達する学生写真家の中から、自らの手



明治大学「金石」より

で最大限の写真の幅から我々の向うべき所在を、明らかにしようとするものなのです。写真が世界に現われて以来百三十年間の総点検もあり、我々が写真を表現手段として使いながら、「生」の問題、言い換えれば今日、この時点に及いて『我々がどう生きようとするか』という問題なのです。

その真只中にて、セレクト編集合宿は行なわれました。三泊四日から、さらに一日延長した合宿の苦しいあがきにも似た戦い（莫大な写真を眼の前にして、自らを世界に対する一個一個の人間の生きようとする戦い!!）の中で、我々は自らの内よりその「生」をつかみ取ろうとしました。個々の「生」がぶつかり合い、その肉体に一つ一つ痛みを刻みつける如く、上質な議論や、写真の評価などではない、真に我々が生身に生きている現状の中より、我々が提示した問題の一つ一つをつかみ取る作業を執拗に続けました。

このテキストは合宿での「記録」をまとめたものですが、記念として残そうとするものでもなく、それぞれ写真をやろうとする者が自らの行為を立てようとする時、サークルが問われた時に、糸口をさがし出せる資料にしようと思われたものです。

このテキストをどう使い、何を見い出していくか、それはこれを手にする個々の人間の課題だと思います。

写真をどこに据えるか

写真家は眼のまえに起こった瞬間的な事象に、シャッターを切る。目撃した瞬間に、その創造的な仕事のほとんどすべてが、一挙にはじまり、そしておわるのだ。そこでは、概念や記憶や、比較、分析、反省などの知的な働きがほとんど関与するひまがない。しかし、写真家がシャッターを押した瞬間に、そこになにか自分と置きかえることのできる価値を選択させ、決定させ、また結果として、クックとダビッドソンのような、それぞれの決定した価値に、差異を生じさせるなにかが働いていることはたしかである。「歴史は何を教えるか」より

おにぎり坊や

- 目が気になるけれども。何か考えてるわけでもなさそうだけど、何か見ている気もするねえ。
- 放心しているような目だ。
- こんな子供が、こんな放心した目でいるってこと、何か考えさせられてしまうんや。
- 状況みたいな事、考えさせられるな。
- そうかしら！
- 何かもろにさらけ出していてこわい気もするんだけど。撮ったこちら側がどうかっていうのは関係ないみたいな感じ。
- 心にズドンと響いてくるみたいな事。
- 戦争の事、リアルな事の中での「長崎」ということよりも「痛み」



長崎の被爆した少年
被爆直後に撮影された
ものを同志者大のS君
が複写した写真。我々
は例会の時おにぎり坊
やと愛称で呼ぶ。

- みたいな事の方がより伝わって来るんじゃないかしら。
- 同じ年頃の子供でありながら、子供が無表情でいることから、その時代の背景も気にかかるんだけどなあ。
- そういう事じゃない気がするけど。自分自身にうったえて来る、子供の顔にこめられてしまうものを写真に感じるんだけど。
- 背景も少しは気にかかるんやけど、何があって、それがどうやという具体的には少しもわかってきーへんのや。それよりも、頭の包帯やったり、顔の傷の血がまだこびりついていそうな感じの方が、ナマにこちら側にはいつて来る感じがや。
- 自分まで見すかされるようなところで撮っている。長崎・原爆・戦争という状況の中におかれて子供という事に対してははっきりと向い合っているという感じじゃないと思う。子供の顔に、自分がギューンと感じて、のめり込んでいくようなところがある。
- 撮る側の人間の中の、受けとめるしかないという姿勢が気にかかるんで、向こうの痛みも何もかも背負い込んでしまっていると思うんや。けれどそういう撮り方が悪いとか何とかでなく、確かにこちら側をくぎ付けにするものはあると思うんや、それにこういう撮り方するこの人の事もわかってくるけども。

難民の子供

— この子供、周りの事なんかわからないけど何かズキンとするものがあるなあ。

— 動物的な感じがする。

— でも何か、子供みたいじゃないまるで生活の中で疲れたみたいなどころがあるよ。しわや、表情を見ると。とても子供なんて思えない。少しろんな苦しさみたいなもの感じさせると思うんだけど。

— 子供のなんていうか、あどけなさみたいなのも消されている感じ。こちらが何か苦しくなってしまう。

— 見てる方がジワジワ苦しくなっていくって感じでもないって気がするんだけど。沈んでいく感じは、ないと思うけど。この子も、こっちもお先真暗って感じは全然ないよ。

— むしろ動物的な動きを感じさせるナ。この子の中に一本ズトンとして張りつめた何かがあるって感じ。

— 女の子の方なんかみるとむしろかわいらしい気がするねん。無抵抗で今にも冷たい涙がこぼれ落ちそうな目つきやなあ。

— で、それではっきりこの子がいるって事を感じさせるんだ。

— 確かさがあるね。

— さっきの長崎の写真なんか見ると、向こうの持ってるものの全部こちらがかぶるしかないっていう重たい感じがするんやけど、エルスケンの方なんかそういう所とは違っているって思うんや。すぎましい生活環境とか何ていうか生活感みたいな中にバーンと居かれ、たぶんこの子は



エルスケン
難民の子供

こんなものなんやって気がするんやけど。ずっとこんなふうに生きていけると思うわ。

— 苦しい生活なんていったけど、もっと起き上ってくる力みたいなもの感じるなあ。

— すごく強いって感じ

— この子の回りにあるすごい事、全部背負うんじゃないかって、そこから起き上ってくる力・生命力みたいなものがあるんじゃないかと思う。

— エルスケン自身も何かすごいって気がするよ。難民っていう中に、たださーと触れたっていうことじゃなく、モロにつこんでいるんだ。子供の回りでチラチラ、ウロウロしているんじゃないかって、モロにつこんでいるんだ。それ以上にすごいと思うのは、その受けとめ方なんだ。こんなふうにバーンと撮ってきちゃうんだから。

— 子供の中の力みたいな事言ってたけど、作者自身もそういう所にギューンと自分の身を立たせているよ。向こうに見せつけられてるんじゃないかって、エルスケン自身も決して負けていないって気がする。

— エルスケンっていう人はいったいどんな人間なんだろう。会ってみたい気がするよ。こんなとらえ方のできる人間っていうのは、どんなふうに生きている人なんだろうか。



エルスケン
難民の子供

ひな人形

写真を撮るといふ時、自分たちの外で起っている事にカメラを向けている場合がほとんどである。自分の引き出しの中に小さい頃からあるいろんな「ガラクタ」みたいなものを捨てないでずっと持っていることはだれにでもあるのではないだろうか。そういう物は、生活の使用からはずされ、本来もっている用途を奪われたものである。個人の中で語れないものを宿しているのではないか。

— 人形とは思えない。むしろ人間臭さといったものを感じる。

— 自分の心のゆれが同時に伝わって来るなあ。

— そうだな、ベタの方がすごいと思う

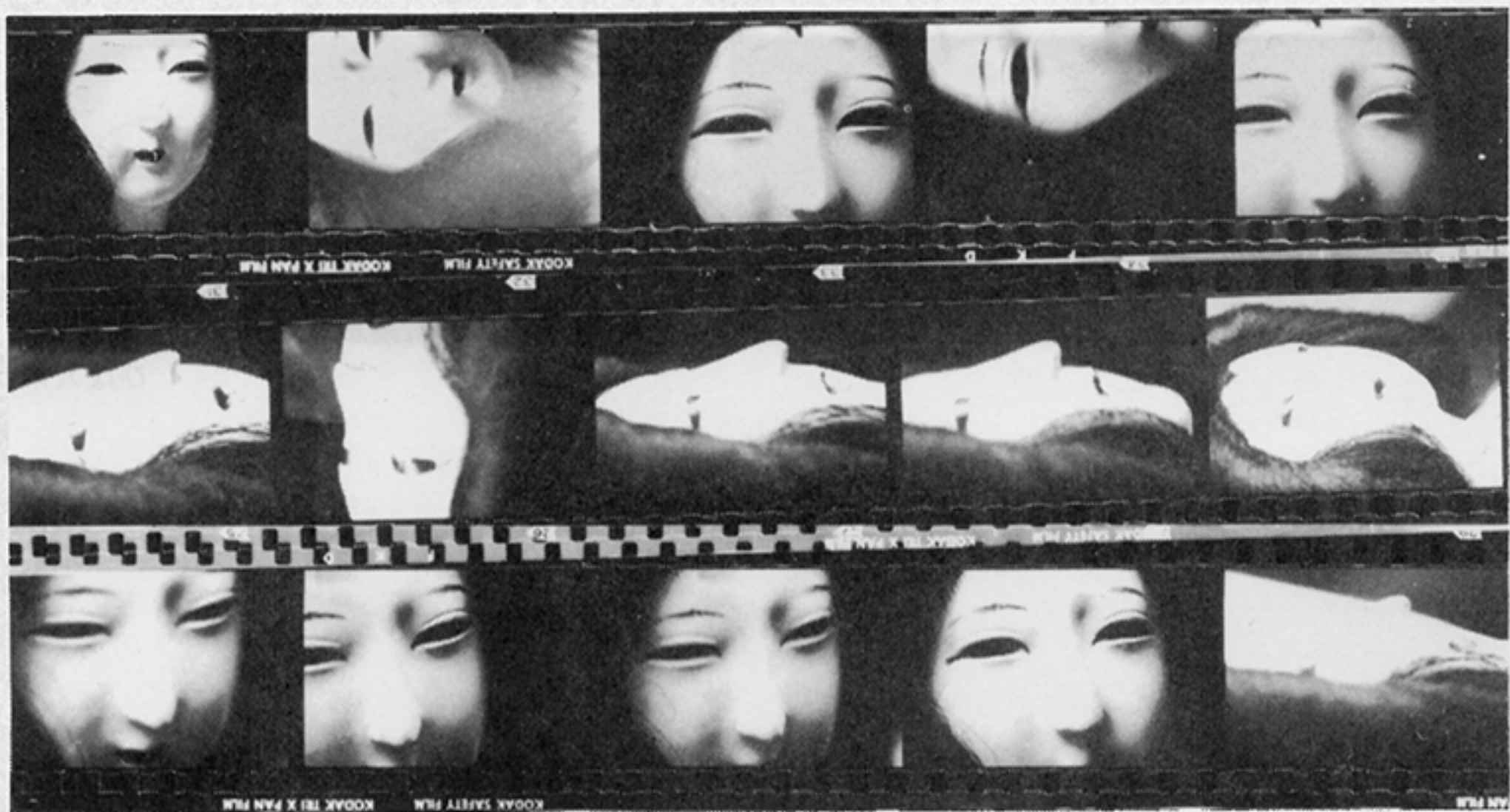
— このベタの中に、この人がやった事すべてがあるっていう気がする。何ていうんだろう……感情とか思いが、撮る中で「うねり」を持ちながらゴーと流れていく、それも変にこだわることなく出て来たという感じだ。

— Yがやった事ってどういうことかよく解らないんだけど……

— 自分の内面みたいところを、すごいエネルギーでいろんな風にぶつけていったと思うんだ。特にベタなんかみてると思うんだけど。

— どうしようもない気持を写真にぶつけていった感じで、私なんか自分のもち方みたいなものはどうなのかと思っただろくろくしてきて……離れられなくなる。

ひな人形・ベタ



— 確かに、こんな事は自分にもあって、人に話しても判らない、どうしようもない気持を写真にぶつけているのは、うらやましいし、いいなあと思う。

— 写真に対する執着がすごいんだな

— この写真というのは、見ている自分の身がだんだん軽くなっていくようだ。生身のところでやっていこうとするこの写真は、内面の底に潜んでいくようなものでは決してない

— このひな人形の中で、Yがやっていこうとしたことは、確かに個人的なんだが、見る側もゆれを感じさせ、そういったゆれはもっと個人の根元にあるものでもゆさぶってしまう。

— 俺の中にあるどうしようもないところでジーンと来てしまう。そうした自分の体の中のエネルギーをぶつけていく、そうした時、得るものは確かに信じられるものとしてあるはずだよ。

— こういう風にやってきた事としてあるけど、これをつきとめていても増々動けなくなるだけで、自分の中に押し込めて行った行為をもっと切り返していかなければ、どうしようもなくなると思う。もっと自分の中から押し出す行為をしなければならぬと思うんだ。

作者レポート

自分の身が動かなかったり、どうしようもない、もやもやした思いを知らず知らずのうちにため込んでいた事が、ふとしたきっかけで沸き出



ひな人形

てくる。そんな事ってだれでも経験してる事だと思う。そんな時、人は酒でまぎらわしたりする。私も、枕に顔をうめて泣いたり、日記になぶり書いたり、詩を書いたりした。

去年の秋、撮影合宿に行きたい事や、学校の事なんかが重なってどうしようもなくつらくって、夜遅く部屋でひとりになって酒を飲んだ。自分が絶対やらなければならぬ事や、したい事が解っているだけにその後、寝る気にもなれなく頭がいっぱいで寝れなかった。そういう事が気になって、夜カメラを持って、もやもやを吐き出した。撮りはじめどういうふうに撮ろうかと思った。レンズは五十ミリのしか持っていないかったし、被写体が小さすぎて何が何だか、こちら側がとらえ切れない。黒紙をボディとレンズの間に入れたりしても、ぐらつくのでレンズをはずし反対に向け、ボディもレンズも手持ちにし、十ワットのスタンドで撮るようになっていった。でも暗くってピントは合せにくいし、よけいに集中しないと見られない。息をつめて、しばらく込めるだけしぼって、全てをヒナだけに集中させていく。ファインダーの中は普通見るヒナとは異なって、別の空間があって段々とその空間に落ち込んでいく。写真を撮ってる感じはなくなり、無意識のうちにシャッターを押していく。町で写真を撮る時のシャッター音は消え、部屋全体の雰囲気も何もなく、真闇の中に四センチほどのヒナの顔が、別世界を作っていく。

現実のなかに 身をおいて

Mの写真

— 嫌な感じだ！

— 人間じゃないみたいなんだ。鬼みたいだ。

— 何かすごく露骨な感じでドギツイよ。露骨だっていうのは、女のおいであったり、ムンムンする化粧のにおいや、女同志がファッションを競い合うといったような……。そういった感じなんだなあ。

— 俺があんな女と会っても一べつするくらいで通り過ぎるなあ。全然気にならない。

— 私もこんなの平気だもん



— あんな女と会ったら俺は逃げ出すな。そんな事しか解かんねえや。
— こんな人なら今どこにでもいるし、とりたてて言う程すごいなんて思わないけど……。俺はこの写真がこわくてイヤで、恐しい。あれは人間の顔なんかじゃないし、あの黒さは悪魔的で、鬼そのもので、邪悪で、緊張感でいっぱい余裕なんかないんだ。

— 亡霊みたいで、マネキンみたいで……。

— それはそうなんだって思うけど……。人間で鬼みたいな様をしながら生き様をさらしているんだ。今、その事がひっかるんだ。

— あのポートレートは、本当に気持が悪くなるよ。人間のどろどろしたもののの中に、人間がもっと、どろどろした形でいる感じで、そういうふうにはいて欲しくない気がする。

— 自分の、生きようとするその事を見つめ、そのほとばしりを、どうにかしようとしているのに、そこから逃げようとするのか。

— 向こうに実際にかかわりたくないんだ俺は。一緒になったら、染ってしまう事がはじめからわかっているから。

— 何がどうあるのかっていうのを感じてて、自分がどう居るかわかっているから、そんな自分が嫌なものだから、そこから逃ようとするんじゃないの。

— 様々の触れ合いの中で感じて、こちら側にもっとすごい形でぶつけられると、ゆったりと構えていられなくなるって事があると思うんだけど。

— 構えられないっていうより、それよりもすぐ拒否してしまうよ。

— さっき露骨とか言ってたけど、女のドギツさみたいなのだけじゃなくて、今の人間の露骨さ、ドギツさなんじゃないかな。こんな、どこか赤むけしたみたいなの俺の中にもあるって思う。逃げ出したいなんて言っただけど、自分の中にも、あの写真の黒の部分の中にはいていくところがあるからこそ、いたたまれずに避けていくんじゃないかな……。性格的なものじゃなく、やられてしまう、やってしまみたい事。人間の奥底にあるものをみて、撮ってるって感じるよ。人間のむき出しの今の動かしがたい物を見せつけられてるようだ。利己的な人間の、イヤらしい人間の……。男と女が、だまし、だまされるみたいなこと。

表層の文化のかげで

— 俺達は抵抗なしに食って寝て、時たま泣いて笑って、割と軽く暮らしていこうとするんだ。それが無意識の中でしかないんだけど、無意識が積み重なっていく日常にどっぷりとつかっているとと思うんだけど。

— でもいろんな華やかなものと紙一重の世界に、不安と不満が渦巻く中に人間がうごめいてると思うよ。ビルのジャングルをさまよう都市の原住民なのじゃないか。銀座、新宿、池袋……デパートのあのキンキラした照明の裏には、表向きのきれいななんか信じられないような、トイレでの女同志の話がされてる。そこで吐かれるものは、悪口やイライラした言葉、怒り、押えられている、心の中にあるネバネバしたもののド

口沼。女達は又、街に犯濫するどぎついファッションと化粧の競争の世
界へ引きづり込まれていく。緑のマニキュア、赤くちぢれた髪、ぬれた
口紅、個性的なニューファッション、ニューファッションっていう中で、
うろろろするんだ。チクチクと続く、行くあてのない戦いに、心をすり
へらし、荒されていくんだ。そうなっちゃうから、閉された心の奥にあ
ることを本当に、どうすることもできなくなってしまふ。どうしようも
ない不安定なところに行きついちゃうと、男を求め、グロテスクな、自
我の化面のような個性を着る。こんな悪循環の中に、さらされてる。

— Mの写真は自分も置かれ、相手も置かれてるところ——それは、
都市の見せかけの幻想でぬり込められた虚飾のうすっぺらな文化の中で、
本当は自分の中に閉じ込められ、傷つけ合い、そして荒すさんで、飢え
乾いた人間の砂漠なんだけど——そこに砂嵐を立てるように、撮って
いく。自分をギューンと強く、だれにも敗けないみたいにもたなければ
生きていけない、そう居させられてるリアルさを感じる。

— もう、やさしさとか、穏やかさでみんな済せようとしてもダメなん
じゃないかと思う。

— でも……。それが私で、私のまわりじゃないかしら。

レポート

我々の日常——授業をサボリ、マージャンをやり、家に帰ればテレビ
を見、休日にはかわいい女の子とデートごっこをする——それらの一枚

Kの写真



裏側にはすざまじい現実があるということ、日常の楽しさにかくされて
いるドロドロとしたものが我々自身のすぐそばにころがっているという
事。だからといって、我々は日常を完全に捨て切らなければならないの
だろうか。しかしながら、自分には、そのぬるま湯のようなものが魅力
のあるものだし、それを捨て切ることは、とうていできないような気が
する。

「何かをやろう！」と思い、もっと色々な事に触る為に、ぶらっと大
阪を歩いたり、パチンコを何時間もやったり、もっと人間がよくやるこ
とに触れていく。今までのように家の中にとじこもり、築かれた城の中
で何もしないでいるよりも、何かしようとして何となく町に出た。しか
し、そうしているうちに毎日パチンコに行きたいと欲望がわき、何かを
見い出そうとした事が、世の中の雑事に、泥沼の様に底のない中に入っ
ていった。今考えてみて、結局何もしていなかった。

人の中に入って思い切りやりたい気はあっても、どうしても居易い所
からおりていく事をしなかった。目の前の写真は、皆これまで自分がお
りる事をしなかった所にいる写真だ。いつもなら何となく嫌で、避けて
しまう写真を前にして、相当苦しい。だがまともに向き合ったとき、人
間の腹わたにさわった。そしてすざまじい勢で自分を通して写真が嫌
でなくなり、本当に自分に必要な写真としてもたように思う。

人間の本質的な事

——自分が頭の中だけで考えていた事がわかった。

相手も生きていて、こちらも又生きている。そんな中で写真をやり抜こうとするとき、(写真でなくとも)簡単に肯定や否定をして通り抜けすることではなく、もっと考えることがあるのではないだろうか。生身で感じる事。(近松の話は、すごくよくわかった!!)その事を一番、強く感じた。

レポートより——

ある班で、「M」の写真を見ている時、ひとりの女の子が「あの人はよくない。」というふうに言った。そこから「いい」とか「悪い」とかいうことでこの写真を本当に見ることができるようかということが問題になった。「あの人は悪い」とか「いい」とか、モラルの問題にして自分で押しのけるようにしてしまった時、我々は「ことをみる」ことをしなくなってしまうのではないか。たとえば、その人がそうあるという底にある現実とは、そんなに軽く通過できるものではなく、モラルの問題で通り過ぎたとき、自分が浮ずってしまうように感じる。我々は自分自身に対しても同じようにしてきたのではないだろうか。

班の中で、ジイドの「狭き門」や近松の「梅川 忠兵衛」のことが、作者が何を大切にしたのかというのを頭において話された。

地上の恋を捨てて、天上の愛にあこがれて孤独の闇に消えるアリサを描いているこの小説を多くの人はアリサの潔白で美しい姿と、それを守

ろうとするジェロームの姿に一つの神秘を覚え、動かされると思う。しかし、ジイドが、この小説を書いた時は、彼自身の内的なものの変化の自分の中にある人間的で本質的なものを据えていくかどうかの、ギリギリの線に立っていたと言える。キリスト教的先入観による「徳」を、その極限的なところに追いやり、アリサのもつ世界、さらにそれを守ろうとするジェロームのいるそういう世界を、破壊しようとするジイド自身の苦しみが「狭き門」の中にあるのではないだろうか。

忠兵衛は女郎・梅川を好きになる

梅川が金で男に身受けされようとする時、女郎屋の主人に「梅川と一緒にになりたい」という。「向こうの男も金でやるんだから、お前も男なら金でやれ」と言われる。金飛脚である忠兵衛は、仕事で江戸から藩に金を運ぶ道すがら、藩にいく道と、女郎屋へ行く道の別れ道に立つ。一つの道は制度のいっばいある息苦しい世界、もう一つの道は梅川と一緒に言えども獄門曝し首。

「どないしよう」

身をあかく。そして、好きな梅川のいる女郎屋への道を走り、金包の「封」をピッと音を立てて切る。「よい」「悪い」で言えば梅川は恋などしてはならない身であり、忠兵衛も、金飛脚でありながら、金包みの封を切るなど、もっての他である。近松は何を見切っていこうとしたのか。世の中の掟を破っても人を好きになるという人間的な気持を大切に

描き、慣ぬいていったのだ。この芝居を観る側も、自分達のおかれて
る生活の中から、自分がギューンと心の芯のところから引きづり出され
る思いに、どれ程打たれただろうか。

レポート

涙がひとりでに落ちてきた

なぜなのか全然わからない

生きるという事の凄まじさが

ビーン・ビーンと私全体に響き渡る

背中が寒い

写真ってスゲーなあと思う

おそろしい

ブルッブルッ！

これ以上言葉にできません すみません

今自分の中に綱の目にはりめぐらされた緒々の鎖が解き放たれて行く
思いの中に居る。いろいろな層の生き様をつきつけられ、自らの生の在り
方を思い知らされた。まだ無意識の中にならまだしも、これでいいのだ
と自らの生の方向を見つけた気でいたその行きつく先が、Mの写真など
で見せつけられたとこに自分の欲望を解き放していいのかわからない。
何も見えず、感じられずの暗闇であった。自分の欲望が、何ものかにす

りかえられ、拡散していく中であって、いかにして自分の真の生を獲得
し得るだろうか。巻きつけられた鎖の中から欲望を流し出すには、すべ
ての場において体を投げ出しぶつけるしかないだろう。虚飾をとり去っ
た生身を、この世の虚飾におおわれた世界の真の現実にぶちあたること
これしか言えない。

牧野さんの写真、釜石の写真。これらの写真から今、自分は腹わたに
熱い銃弾をぶち込まれたように、血がドロドロと流されている。この血
が徹底的な自分となるしかない。きれいな事ばかりのチャカチャカした
世の中に住んでいると思って血を流したら、横っ腹抱えて生きるしか
ない。金のこと、女のこと、家のこと等やりたい事をやるとしても、
テメエが血を流し、夥しい血を吐き散らして生きている事を忘れちゃう
時は世の中全然わかんねエ。わかんねエ時ほど壁に額をぶちあてて素裸
のテメエがぶつかって、はね返されて血を流すかしようがねエ。

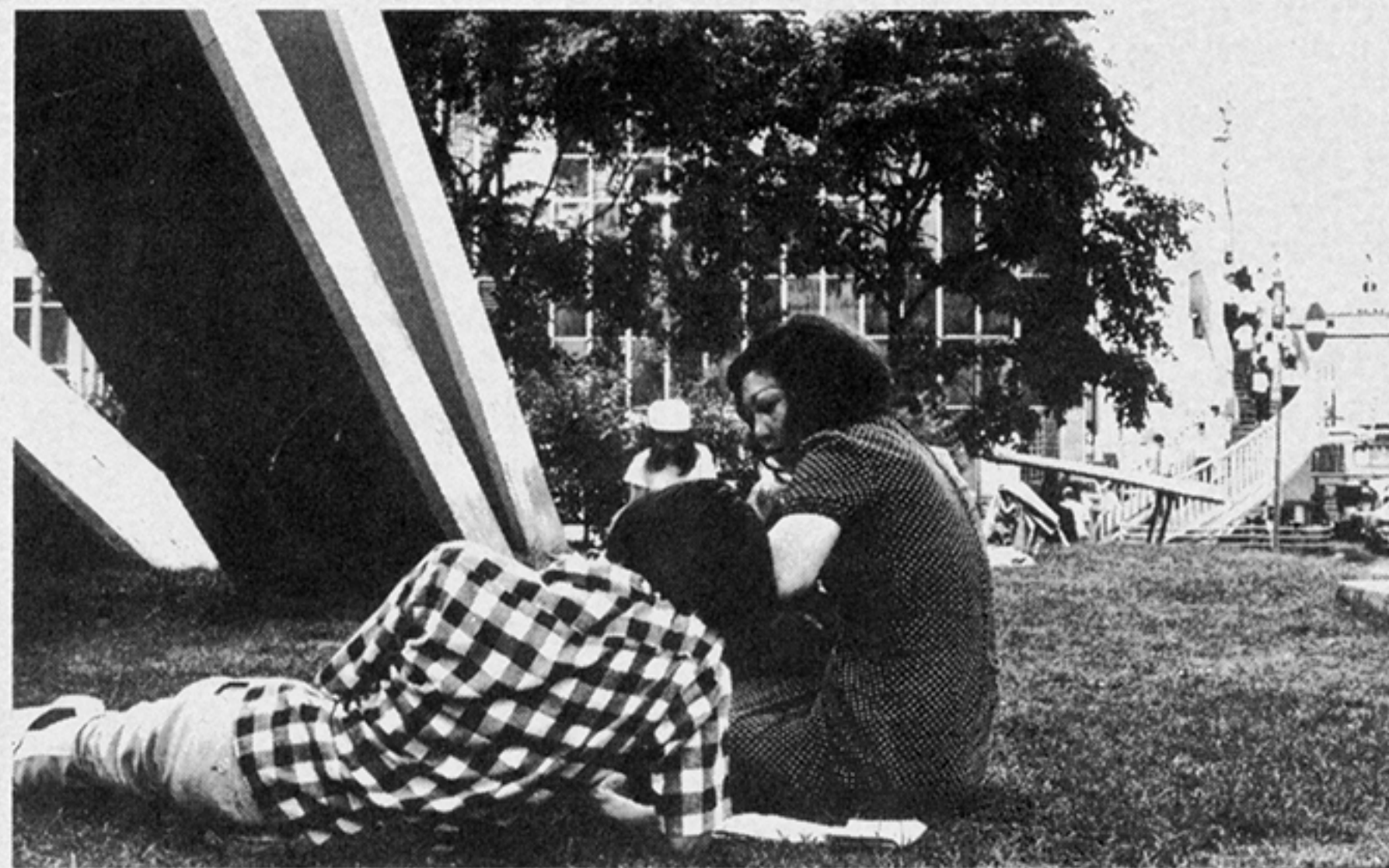
ぼろぼろのまま生きたくねエと思って、テメエなんか生まれた時か
らボロボロだ。大学まで来て小利口になっちまって、ギタギタのボロボ
ロになっちまってドロドロの血のかたまりになるまで壁にぶちあたんな
きゃ何もわかんねエ。もう一度ドロドロの血の池であがけ。毎日毎日の
つまかさなりがテメエの中でテメエをなますに切り刻んでいく。

人間なんか初めは血のかたまりだ
混沌とした赤黒い血のかたまりだ!!

日常と感性

北海道一〇一より

札幌のアベック



— 何かどこでも見かける風景だと思うけど

— 女の人の眉毛がビュンとしてきつい感じや

— 以外とだれでも、あんな所にいるんじゃないかしら

— さっき長崎の女の人の写真を見たけど、不意にかすめ撮られたようだという話が出たと思う。今の荒れた世の中での事がいろいろ出たと思う。この写真はそうゆうふうに引きよせたときどんなものだろうか。

— あたり前の事だと思うけど、そんなあたり前の事が、どこかでせき止められてるのかも知れない。

— 私は、自分と変らないって気がするんだ

— 化粧が顔にしみ込む感じだ。男〃みたいな事がすごく気になる。

〃男に従属する〃みたいな事。自分が何を見ていても、何かしようとするとき男を前にしてふっ〃とするときがある。その中で自分がやろうとして来た事なんかだんだんわからなくなったりして。何か女が荒れていくこわさみたいなものを感じる。そして、自分が荒れていくこわさを感じる。

— 女っていうのは見られる立場でしかないのかしら。

— この写真に実際にうつっている事は、本当に何だろう。

— 当り前の風景なんだけど、どこか違うって感じがする。当り前として片づけていない、そんなふうにすごさせていない気がするなあ。

— 日常、どこでも見られることなんや、と思うけど、ほんととは見すごしていて、そんなことが、すごく問題な気がするんや。

— 知らず、知らずの中で、投影しなければならぬ事が、こんな中にあるような気がする。底の底に見える事が、こんな中であって、その中で、こちら側が、ゆらされていたんだと思う。今、大きな事の中で揺さ振っていたんじゃないって気がしてきた。そう思うと、見過して来た、自分に対するくやしき、親とか社会に対するくやしきみたいなものが、わきあがってくる。そんな中で自分が知らず知らず、やり込められちゃって、このままだと、もう死んじゃうって気がする

— 自分のいてるところはここかも知れない。

— 二本立ての自分みたいな事、今強く感じる。毎日いろんな事の中で、うずくまっていって自分と、写真を撮るとき、変に背をはって、肩をもちあげている、二人の自分。この二人の自分がずっと気にかかっていた。写真を撮る時を、日常生活の線上におかなければならない気がする。

— 当前になっていく事に対して、それを見る目を持ちたいなあ

— だれか〃故郷に復讐せよ！〃っていう事を言ってたけど、そんな中に語られてる意味が解ってくる。自分が、習慣化したような中で実は私の骨がつくられていったんだと思う。自分がはっきり見えない、見えなくさせられていく……。

— たとえば学校なんかどうかな

— うちの学校ってカトリックなんだけど、毎日学校へ行っていると何とも感じへんのに、夏休み明とか、合宿が終って学校へ行くと、門の前ですくんじゅう。授業が終わったら喫茶店へ飛んでって、タバコを吸う。

そんな風にしか毎日を暮らす事しかできないねん。それなのに、そのうち学校に慣らされてしもうて、そういう気持が解らへんようになる。毎日せつせと学校へ通う。白い壁、病院のような学校を恐ろしいとも、何とも感じへん。あたりまえにしか受けとめられんようにされてしまう。

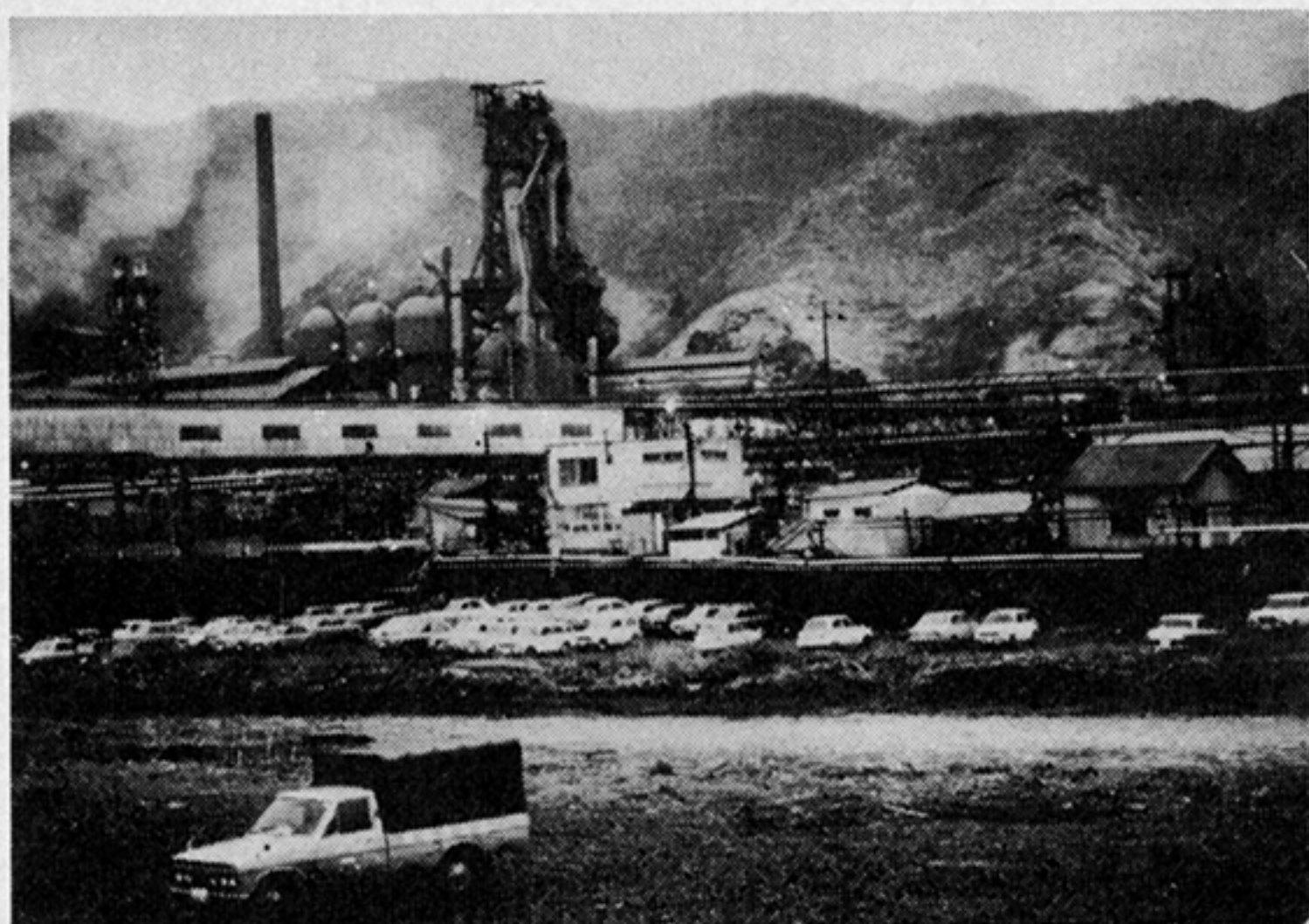
—大阪の地下街でも、人がアリののようにうじゃうじゃして黒山の様にたむろする。そんな中で、でっかくてキラキラした、時代の最先端のような泉がどかっとできてしまう。今、噴水は出なくて、造花の山が気持悪く、でっかく位置する。狂い咲きの花が、噴水をうめつくしていく。その空間を、人間が何とも思わず、噴水の回りにすわっている。名古屋の地下なんかやったら、五・六人が汚らしい格好してうろついていると、ガードマンが後をつけて来たりする。又止ったり、すわったりすると注意される。「ここは通路ですから、止まらず歩いて下さいなんて言う

—札幌の地下街を歩く時、ちょっと変な格好していると自動カメラのレンズが常に監視していて、一ヶ所で集中監視をやっている。

—そうなんだ。自由に何でもやれるところで、ちょっとでも変な事していると、気のつかない所に置いてあるカメラのレンズが見てて、それを監視室ではずらっとテレビが、写し出し、となりの室のファッションの最先端のような所とまるで異なるものがあったりしている。

肉体の闇の

きしみに向けて





自立できない個

電車の中をみると、週刊紙や、どこかの店の広告のポスターというように、コマージュリズムがガラガラしているんですけれども、そこに立っている人間を見ると全々そういう中にはいないんです。くたくたになった人間の中を風がブァーと吹いてまるで天国と地獄っていう感じがします。東京でも札幌でも同じような事は起っていて、なぜそんな形が出て来るかっていうのがすごく問題なんです。よれよれになった人間は都会の中で渦巻いているんですよ。

ガランとした大きな建物で、赤い絨毯を敷きつめた銀行の中では女の子が、まるで花の様にとりすまして、ビシッと置かされているんです。だけど一担順法なんかで電車が使えなくなると、その女の子は延々と会社まで線路を、何が何でも歩いて行くなという事があるんですよ。都会の中で人間が本当にどうしたらいいかわからなくさせられているんですね。人間を都市の中に塗り込めるような事は他のいろんな形で日本中に起っているんです。東京でオリンピックがあつて、大阪で万博があつて、札幌でオリンピックがやられてどんどん都市の綱をめぐらしてきて、そうしたらまたかという具合に、よりもよって沖縄で海洋博という事が起ってしまうんです。

明治で釜石をやろうというのは六十五年の話からその流れがはじまるんですけれども、その中には浅間山荘の事なんかもありますね。人間の中で行為を立てる事すらできない中で、あの事件は、こうするしかなかったという事のあらわれなんですよ。

北海道一〇一より
苦小牧の女



△しかし、現実に我々は都会の中の人間の一人なのである。その中で回りで起っている事をどうとらえていかなければならないのだろうかV

—人間っていうのは環境によってだいぶ違うと思うんだけどね。釜石の写真の男の子を見るといろんな事表わしているかも知らんけどね。なんか冷たいと言はんかなあ。私がいっていかれへんような感じがあって、何かそこに行っておい返されそう感じがしてね。

—家から女子大へ通って、習い事とかする空間の中から最初写真見たとき「釜石へ行きたい」って言ったけど、じっくり見出してから「行かない」と言う。「なんで行かないのか」と聞くと、「釜石にあってしまうことは自分が受け入れられない所にあってしまう」って言ったと思うんだけど。そうじゃなくって釜石が今の状態では受けとめ切れないもっと深い、いろんな重みの中にあってしまう事実を自分ではっきりとつかめないだけの事であって、だから釜石が拒絶しているんじゃないかと、自分が本当の事に向かおうとすれば、一つ一つ自分のものとしてわかってくるだろうと思う。「行けない」と言ったときには、日常の空間の中で、毎日毎日、自分の回りにあふれ出ている事自体を自分でとらえていけない事につながるんじゃないかと言ってるわけなんだ。

—こういう場でないと、いろんな事がわかって来ないんや。水俣なんかやったらいろいろ報道されてるけど。

—いくら激しくいろんな事があっても自分の回りを通過させることで、

たとえば「ああすごい」とかと言ってることじゃないと思う。

毎日、新聞を見ると、白骨死体が発見されたり、赤ん坊の死体がコインロッカーから出て来たり、子殺しの事とかのせられてたりする。そういった事は、自分が母親になって、毎日子供を育てていくっていう中に自分の身を置いていくっていうか、そこに自分が生きる事をかけた時は、そうした恐しさだったり、そうなり得ない事の意味がつかめて来ると思う。「きょうも恐しい事が起ってる」というように情報は、犯濫してて、水俣にしてもそうだけど、その時に、何かの思いっていうか、「自分はこう思うんや！」ということを持たない限り、全部が通過物としてしか物事はないんじゃないかな。」

—コインロッカーの事はすごいと思うんやけど。

—水俣の事っていうのは新聞で知ったんでしょ。あれは紙でしょ。本当にあることっていうのは、もっとものすごい事だっていう気がしますね。ものすごい事が紙で感じられないなら、あなた、水俣の水を飲んでみればいいんですよ。そうすれば、何が起っているかわかるんですよ。そういう事とは離れてて、もっとひよ子みたいにしたいのかな。感じるべき事を感じられなくなるっていうのかな、感じる事は戸だなにしまつて、自分の生きる事は別にもつこととか。情報はいっぱい入って来る。けどそれを「こんな事が起ってる」とか「ちょっと刺激だな」というふうに、刺激として受けとったりして、肉体で感じる事がなくなっていると思います。苦海浄土の中の言葉、石牟礼道子の言葉っていうの

明治大学「釜石」より



は死者の言葉を代弁しているので、水俣病の患者の側から照り返してくる中に自分が立ってる事なんです。患者の遺族が「金は一銭もいらぬ。会社の重役から順々に飲んでもらおう。みんな水俣になってもらえば、それでいい」って言うでしょう。石牟礼道子は語れない言語、言葉にならないものを書く中に、彼女の位置を見い出しているんですね。ことばにすれば、つくせないものを、目に見えるようにしているんですね。生きているもの、そのものを目に見えるものにすればどうかっていう事に彼女は向っているんですよ。

テレビでやったように、水俣の猫がよたよたになるみたいな事、わからなければ、水俣の水を飲んでみればいいんですよ。そうすればわかりますよ！

——私なんかも、ものすごい事を、驚きの中で感じる事はできるんだけど、それに対して、自分で何にも手を下していない事、肉体に対して語る事、自分の中身に対して何も接れていない事っていうか、肉体に対してやっちゃう事なんかがもてなくて……今言われた事なんかも、もう切実にわかっていうか……。

——生きる行為みたいなのは、すごい感じがして、俺なんかこう、自分の中で失なわれたものとして……全然、いろんな事に距離おいてたりする。忘れすぎていくみたい……そういう事をずっと繰り返して来て……今、釜石の写真をやる時の事を話すけど、やり出す時は、いろんな事がわからなくて。行くまで何日も、何日も、相当日を重ねた

んだ。その時は釜石をやるか、やらないかっていう事の中で、自分が生きるか、死ぬか、みたいなギリギリの事があった。集会の中でみんな自分を追い込んだとき、やるしかないっていう事だった。でも俺自身としても、やる事の中で何かつかんで行こうっていう感じで、行った。いろんな話がさっきから出てるんだけど、どう生きるかを考えた時に、やっぱり自分の中で、はいずり廻るっていうか、いろんな事の中で自分の身をさらしていくっていう気がする。

レポート

二月に足尾に行った時、一人のおばあさんと会ったのだが、そのおばあさんは、さほどの年ともみえないのに、少しボケていて見知らぬ私にポツポツと話しかけてくる。私は足尾や古河の事を聞き出そうとしたのだが、全然そんなことはしゃべってくれず、「みんな、自分をおいていった」、「おのれが、わたしをばかにする」とか言ってくる。その時、何かを感じたが、それがはっきりしなかった。今、ここで思うのは、その時感じたことをはっきりさせることができなかったのは、その時の自分の「居方」があいまいだったからだと思う。家のぬるま湯のような居易さの中にどっぷりひたって自分の事をいい加減にしてきた私には、とうてい、人が生きる事、生きていく事を、とらえることなんか、絶対に絶対に出来るわけがない！！

現実はいつ俺を殺すかわからない!!

そして魂を抜かれ人間が人間としてではなく置かれてしまう。それには自分を守ることではなく、現実の中で一瞬、一瞬かわってくる中で何を見て自分のものとするかと、言うことであったり、そのことをどうするかであったり、様々な経験を経てつき通すことである。自分が、自分がと「まわり」を全然見ずに、現実の中でいろいろあることを決定せずに無関心に通り過ぎて来たこと。

今、俺、再び生きようと思った。

『釜 石』

釜石の写真をはじめ見ていく中で「生気がない」ということが言われた。血のドクドクした感じはあっても、活気、情熱みたいなものがないという中へ、どんどん入っていった。しかし、「生気がない」という事で片づけられない何かものすごいものがあるという事に話が進んだ。

—自分が毎日毎日、生活してて、欲望だとか、回りにあるいろんな事、たとえば遊ぶ事の中でどんどん転化されていく気がしてて、すごく恐しい気がするんだけど。私が本当に、やりたいと思ったり、やらなければならぬ事は、生活の中で、犯されて、曲られてしまっていると思う。そのことから、はみ出した「人間のウミ」みたいなものが写真にあ

ると思う。転化されていく中から、今そういうじわじわにじみ出る「ウミ」を本当に、つかんでいかなくちゃ、私なんかもう、生活できないって感じがするんだけど。ウミを、どんどん引き出して、さらけ出してしまいたいっていう気持でいっぱいなんだけど。そうしないと、本当に私どうなるかわからないって気が、さっきから写真みてて感じるんだけど。—生気がないなんていう、そんなに弱々しいものではないって気がするんやけど。この写真は。もっと表出して来る、ウミがドクドク出て来るような、激しいものがあるんか!!

—隠ぺいされちゃってるノさっき言ってたけど、ウミみたいなものを、釜石でつきつめれば、つきつめる程見えて、ギラギラ流れ出している。都会の人間は、それをどうにか、自分の知らないうちに隠してしまっちゃってるから、逆に写真を見ると、ほんとにわかっちゃうんだけど……

㊦ —七一年の終りの頃の写真なんだけど、六七年以後の闘争の中でも続けられて、つかみとることもやれてるんだけど、七十年になって、いろんなものをかぶって来てて、これがその最後の写真だと、今思います。撮った人間も、この事を、どこに向けたらいいかわからなくなってる、いろんなやつが、ダーとぬけていったんですよ。時代を波をかぶる事と、その中で自分が何かやる事の全部を釜石に向けてはいった感じで、ここでもうぬけられなければ、どこにもぬける所がないって感じです。こういう風にやった後は、みんな主だったやつは、自分のいろんな事の



中に、びゅーと、はいつていつたりして、ものすごく、船が半分沈んでびゅーと、片向いていく感じがして、すごいっこみ方をしていたと今見てて思います。いろんな人が撮ってるんですけど、全体にこの中にびゅーっと入っていつて、それだけの事はやってると言えます。見るともうわかるんだけど、向かう時の感じだとかがすごく、カメラから見る時にもう、フレミングの中でバーンと決めてて、撮る時の感じってものすごいと思いますよ。写真をとるやつならわかると思いますが、自分がチャチャする時に、ボーンと見たいつて気がするよ。

ファーと浮いたり、何かキラキラする物やピカピカする物に行つて、何か自分の生き方がフワフワしている時、あいつハ写真Vの前に、座りたいって気がするよ。あそこから感じさせるものは、そんなもの吹き飛ばしてしまうもの。

レポート

生の人間が正にナマに現実につかる。

自分と現実をつらぬき通した行為をみたとき、自分の心は大きく揺れる。今まで自分がやってきたことが表出してくる。ひっかぶって来たこと、ひっかかってきたことが、次々に出てくるのである。そうさせる写真であり、行為である、「カマイシ」は。今、我々はこの行為をやらなければならぬし、やるしかない。自己と、現実を一本のブツといハヤリでつらぬく、そしてその現実とは決して自分の位相とは、別のものとし



て存在しているのではないということ、自分が生きているという現実、現実の中で生きている自分、そこにブチ当たらないで、どうするのか。それを経なくて、自己もクソもない。

断じて抽象でない、具体的な行為を起すこと、やりたいという欲望を、貫徹すること。

自分は死にたくない!!

註

60年代後半に、全国的に燃え広がった大学紛争が、国家権力の先兵としての機動隊の圧倒的な壁の力による制圧に釘付けにされ、組織も又、その内部矛盾を克服できず、自ら崩壊の路をたどっていつた。その停滞から飛び出した極左勢力による運動の頂点となった、浅間山荘事件、連合赤軍事件が、釜石集撮と時期を同じくしていつた。

そんな時代にあつて、我々人間の心は挫折の渦の中で、重い鎖を抱え、行為する場も探し得ず、思いをため込んで行くのであつた。まさにこのサークルも、そんな状況を内にため込みながら、個を一人一人の中で持てず壊滅危機を背負いつつていつた。

これより前、春から11月までに撮影されていつた写真を駿台祭の展示、例会で見切る中で個人写真集にまとめる

ことがなされた。個の問題を、我々が生かされている情況で、主体的に生きる事へと、転換する事であつた。独自の方法論を持ち、全国に展開した熾烈な行為を数回にわたる例会合宿で崩されては立て直し、再び撮影するという形を繰り返し、その中から秩父・能登・高浜・五島などの個人写真集が作り出されたのである。

そしてはつきりと、個が世の中に向き合う中で擱んだ事を、更に集団的な場で発展させようという欲望が、多く沸き上がり、個が、自立した地平での集団が組まれることをめざした釜石集団撮影が、新鮮にかつ力強く一年会で提起された。

「釜石」を選んだ事自体、ラフな設定であつたが、二度の撮影の後続行して行なわれた一週間の例会でも、近視眼的な見方による扱い方を起える、大きな視点がなか

なか見い出せぬことが大きな問題となり、規模をサークル全体に拡大した上で、自分が触れられる部分から入り込んで行った個人の中の釜石から、総体としての釜石に至ろうとする新たな攻撃が開始された。(明治写真部)

③ そこは個室で半開きになっているドアがあり、じかな床の上から、らんらんと飛びかからんばかりに光っている二つの目が、まずわたくしをとらえた。つぎにがらんと落ち窪んでいる彼の肋骨の上に、ついたてのように乗せられているマンガ本が見えた。(中略) 彼はいかにもいとわしく恐いものをみるように、見えない目でわたくしを見ていたのである。肋骨の上におかれたマンガ本は、おそらく彼が生涯押し立てていた帆柱のようなものであり、残された彼の尊厳のようなものにちがいがなかった。まさに死なんとしている彼がそなえているその尊厳さの前でわたくしは——彼のいかにもいとわしいものをみるような目つきの前では——侮蔑にさえ値いする存在だった。実さい稚い兎か魚のようなかなしげな全く無防備なものになってしまい、恐ろしげに後ずさりしているような彼の絶望的な瞳のずっと奥の方には、けだるそうなかすかな侮蔑が感じられた。(中略)

安らかに眠って下さい、などという言葉は、しばしば

生者たちの欺瞞の為に使われる。このとき釜鶴松の死につつあったまなざしはまさに魂魄この世にとどまり、決して安らかになど往生しきれぬ眼差であった。

そのときまでわたくしは水俣川の下流のほとりに住みついているただの貧しい一主婦であり、安南、ジャワや唐、天竺とおもう詩を天に向けてつぶやき、同じ天に向けて泡を吹いてあそぶちいさな蟹たちを相手に不知火海の干潟を眺め暮せば、いささか気が重い、この国の女性年令に従い七、八十年の生涯を終わることができであるろうと考えた。この日はことにわたくしが人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ。(石牟礼道子「苦海浄土」より)

「銭は一銭もいらん。そのかわり会社のえらか衆の上から順々に水銀母液ば飲んでもらおう。上から順々に四十二人死んでもらおう。奥さんがたにも飲んでもらおう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に六十九人水俣病になってもらおう。それでよかし (苦海浄土より)」

現実のどの位相に向うか

現実のどの位相に向けていったら、明らかになるかっていう事なんですね。Mさんのようなとり方だとか、一般に言うルポルタージュみたいなものを必要とする事だとかそういうものの総体を貫いて人間の事というか、本当の事がわかったりする。多層化して、人間の中がとらえられる事もわかっていくわけです。別海の写真にしても、あの事に触れようとした時には、そういう写真が出て来る事があり得るわけです。自分の事とか、ほかの人間の事でもいいけれど、どういう位相の中でとらえれば本当に露になるか、とらえられて来るかっていう事が、今度集まった写真の中で見せつけられて、すごく多様にあるって感じます。自分の方から、今本当にどういうふうに出会わなければならないことから、今本当にどういうふうに展開のし方みたいな事は、いろんな局面にふれていけると思います。それらの全部を通して、いかにしてそこに向うかという事があって一つはMさんのような向い方のような中からある事を、はっきりと目交いに見る事が可能であったりします。

それから一つの写真の中に単一な事を見るのではなく、逆にそこを通す、たたみ重なった位相の奥まで、たとえば一つの写真で負しきを見るっていう事ではなく、その中に人間の奥底にある事にたどりつくって

う事が可能なのです。一枚の写真にどれだけの事をはらみ切れるかが問題となるのです。

へたとえばこんな事はどう考えていかなければならないのだろうか？
北海道の別海の六助さんの近親相姦の事も、普通言われる近親相姦なんていう事ではなく、六助さんの中でどこへどう出しているかわからなかった事の表われなんです。別海というところで、とじこめられておかれた一個の人間の中で、その事を現実に対してどういう形をして出しているか、どう表出させていったらいいか、全く人間の中で、とざされて、びっしり切られているんです。どういう状況に人間が立たされるかって思いますよ。六助さんの近親相姦みたいな事も、単一な事として見れば、精神病理学の一つの例としかとらえられ切れないのですが、そういうことが出て来るまでの事、あるいは六助さんの中で身をよじるみたいに苦しかったどこにも向けられないという事を考えると、その事はどこから来るかというように、みんな重なった事としてあるのです。しかも、あの事は別海という中に投げ込まれた一人の人間の中で起った事で、だから別海の他の人間の中にもあり得べくしてあったと言えます。近親相姦なんて全然なかったと言っても、人間の底を、ガサガサってくずしていったものであったり暗闇の中でのすごい事が本当は起っていて、六助さんの中でも、他の人の中でも、皆な共通してあったのです。

樺太から引き揚げて来る時、人間の誇りから何から全部奪われ、収奪



「北海道一〇一」とは
69年より北海道全土を
ゲリラのように撮影し
つづけている集団
北海道一〇一より
幾寅の少年



五島のおばさん

され尽して、何ひとつない、本当にボロのようになった人が歩く力もなく倒れ、道ばたにうずくまっています。そして又別の形で同じように奪われつくした人間、朝鮮人の強制労働につれてこられた人たちの間に、助け合おうと言うか、その時生れた愛というのは、奪われるものを全部奪われた中の感情で、たぶん氷でびっしりとかためられた中から、かすかに流れ出す水みたい、「純粹」という言葉を使っているんですけど、そういう事なのです。岡本博という人が、二人に出会って書いていた事なのですが、これ程多くの事の中から、二人の愛について、本当に「純粹」なものだと言っているんです。ですから、一人の人間に出会った時に、どれだけの事をはらんでいけるのかという事です。一人の人の顔の中に単一な事だけでなくどういう事にわたってはらむかです。ですから、Mさんがこんなふうに撮った時っていうのは、もっと影の方にはらまれていくはずのものでしょうか。

何を写真の中で先端に凝縮させていくか、問題をどこにしぼったらいいか、そういう事に向って入るとい事なのですが、入る位相は人間の奥の方にたたみ重なっているんです。人間が生きている事のいろんな事を貫くように、はらむように写真は撮れるはずなんです。たとえば足尾を撮る時でも、単一にしか人間が捕えられないっていう状態ではないはずなんです。東京から行って、ポツカリ足尾を撮ったら、本当に足尾の事はつかまえないんです。稚内にしても飲み屋の女の人も、函館で撮ったウェイトレスの事も、すぐく表面だけで終らせているんですよ。そういう



北海道一〇一より
別海の少女

事を捕らえられるのがこちら側になんていう事なんです。本当はもっともっと、自分の中からつき当る多様性みたいな事は、いっぱいあるはず。今度の合宿でも、そのはいり込み方の多様性をすごく感じられます。そのはいり込み方を、もっと写真で為し得るはず。です。

Mさんがああいいう風に撮る事っていうのは、あれは言わゆるポートレートでも何でもなくて、たぶん人間の中の、あそこにいるあの女の人も撮っているMさんも、皆の中も、"砂嵐"だっていったけど、ザーと通っている砂嵐の写真なんだって思います。砂嵐の中に写真を置いたら、この女の人が砂嵐の中で見えたという、絶対ポートレートって言えないんです。あの写真を見た時に、言わゆるポートレートっていうふうにしてしまったら全然調子が狂ってわからなくなるんです。そんなふうにして考えていくと、本当に撮るコトっていうか、いわゆる被写体は、本当は無数にあるんです。たとえば今の砂嵐にしても、そういうふうにしてもコトは撮れるんじゃないかと思えます。ビルを撮っても建築写真じゃなくてもいい事だったり、女の子を撮っても砂嵐を撮る事だったりするんです。一見すると、Mさんののは、人くせのある写真なんですけど、そういう見方でのぞんだら当分あの事っていうのはわからないんです。もともとそういう風に撮っていないからなんですけど。煙草とかかそういうものに目がいてるんだけど、でもだんだん問題につきあたっていくと白さだとか黒さだとか含めて、中へ入っているんです。どういう事を撮りたかったかが、わかって来るんですよ。単純に、被写体だとか、撮り

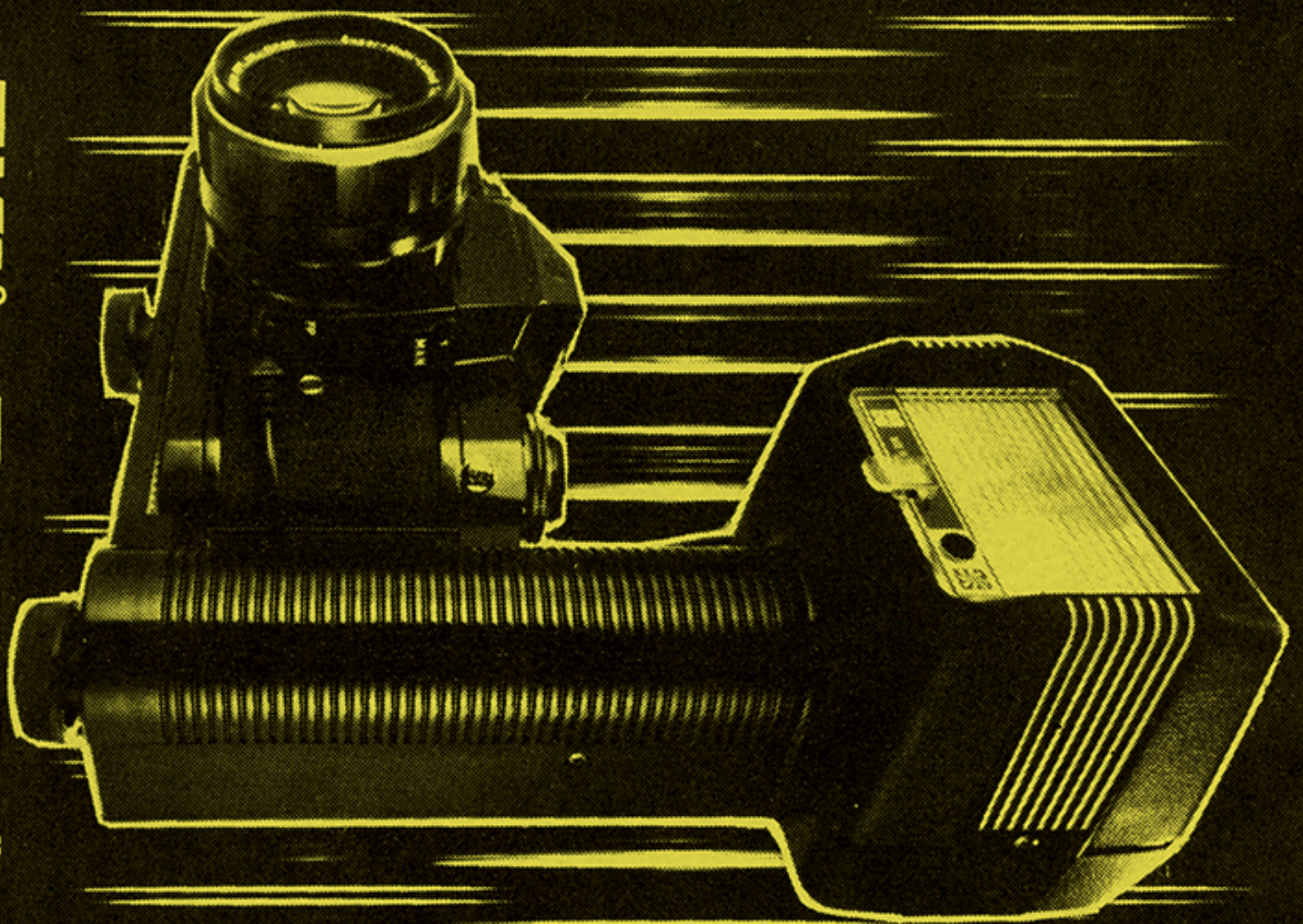


長崎の女

方って言ってしましますが、その中に含まれる事は大きいんです。単に静物を撮るっていいいますが、それをポスターみたいにするのではなく、Mさんみたいに撮る事だって出来るんです。そういう事の先に、何を見るかっていう事なんです。だから撮り方にしてもストリートでなくてもかまわないし、粒子が荒れていてもかまわないし、全然荒れていなくてもいいんです。一人の人間をスタジオで撮ってもいいし、三角テントの中に放り込んでしまってもいいんです。そういうふうに色んなふうにして、でも唯一、ほんとに何かをつきとめようとする先にあるべきなんです。ほんとに自分の中に抜き差ししなくあって、つき通さなければならぬ中にあるって、そこを見なければいけないものに向って写真は撮らなければならぬんです。違うところへ写真を向けても、ただそれだけのものであって、もう行き止まりであって、人間の生きる事、自分の求めるというような本当の事に持ち込んでも、し方がないんです。

"コト"っていうのはいろんなことをはらんで、そこへ問題の焦点を結ばせるんですけれど、そこで"コト"っていうのは、はっきりすると言えます。その入り込み方によって、はじめて見えてくるはず。Mさんの写真にしても、Mさん自身が、その中に同じ地平を感じてはいり込まない限り、本当の事っていうのは見えて来なかったんです。けれど、ここでMさんのがあれば、釜石の写真がいらないってことではないんです。人間の中にある事はこれがあれば、あれはいらないっていう事は言えないんですから。

NATIONAL



エレクトロロボ
オートパタ 3000

（速写ストロボ登場） 驚異の瞬間チャージ

新回路《シリーズ方式》採用

■驚異の瞬間チャージ

オートで撮影距離 1 m の場合最短約 0.5 秒

■ぐーんと伸びる発光回数

オートの場合約 130～1000 回（フルカリ単三）

■経済性バツグン

しかもストロボのメカをフル装備

■シャッター押すだけのオート

（F5.6 で 0.5～5.5 m まで自動調節）

■ワイド発光（28% 広角レンズも OK）

■ガイドナンバー 30

（ワイドパネル使用時 22）

■3 電源（普通単三・A.C.・パナニカ電池）



PE-3000 1 セット ¥19,500

松下電器産業株式会社 写真用品事業部
〒531 大阪市大淀区長柄浜通 3 丁目 6 番地

全日本学生写真コンテスト

野尻湖^{セレクト}編集 合宿

総括書

—現実のどの位相に向うか—

発行日	1973年 5月	定価	¥300
発行	全日本学生写真コンテスト実行委員会		
編集	全日本学生写真コンテスト実行委員会編集局		
印刷所	博信堂		